

不思議を演出する『テンペスト』

2021年3月
眞鍋由比

はと時計2/3月合併号の「不思議を楽しむ」特集でシェイクスピアの『テンペスト』を挙げたのですが、それはこの本を紹介しようと思っていたからでした。

『獄中シェイクスピア劇団』マーガレット・アトウッド著 鴻巣友季子訳 集英社 2020

ワンマンな演出家フェリックスは、自分の集大成ともいえる『テンペスト』のプロデュース中に部下トニーの裏切りでクビになって劇場を追い出されてしまう。愛娘ミランダを三歳で失ったときですら「シンベリン」の演出に夢中になっていたほどのワーカホリックだったのに。全て失って洞穴のようなところに住むようになった彼は、そこで自分をどん底においやった人間たちへの復讐プランを練り始める。ひょんなことから刑務所での演劇ワークショップの演出家の募集が目に入る。そこで囚人たちにシェイクスピア劇のレッスンを始めるのだが……。

囚人たちがシェイクスピア劇の『リチャード三世』や『マクベス』、『ジュリアス・シーザー』などに権謀術数に理解が深く、実に生き生きと演じているというのが笑える。劇中歌をラップにしたり、効果が日本の文楽だったり、小道具がディズニー・プリンセスだったり、空気の精エアリエルをハッカーと見立てるあたり、400年も前の戯曲が命を吹き込まれていくのが楽しい。

それぞれの囚人グループで自分たちのチームのキャラクターの後日談を発表したレポートも面白い。弟アントニーからみた兄プロスペローはクソだし、ミランダはまんまと父の魔術書を盗み読みしてエアリエルを配下にするとか。囚人たちの一番人気はキャリバンというのも面白い。キャリバンがなんと、プロスペローの落とし種だという考察にはなかなかならされた。まるで『カラマーゾフの兄弟』のスメルジャコフのよう。人生の修羅場を生き抜いてきた囚人ならではの凄みを感じる深読み。

この『テンペスト』の上演を復讐に使う話だけど、主人公は復讐をしながらもやがて相手を許す話。フェリックスは許せる？

作者は『侍女の物語』で数々の賞を獲ったカナダを代表する作家。『侍女〜』のシリアスさとちがって笑いあり発見ありの読み応え満点の小説でした。

あとがきも魅力的。演劇の授業で、囚人たちに次の演劇にでてくる罵倒語以外を使うと減点するというルールを作っていただけ、たぶんそれに役立ったのが「シェイクスピア罵倒語造成機 Shakespearean Insults Generator」
(シェイクスピアの侮辱ジェネレーター！)

<http://www.literarygenius.info/al-shakespearean-insults-generator.htm>

完全にユニークなシェイクスピアの侮辱が作成されます！

シェイクスピアの侮辱ジェネレーターを楽しんでください！エリザベス朝時代のシェイクスピア言語は二度と退屈に見えることはありません！

などと、かなり不自然な日本語訳がつきますが、原語は面白いです。

ミランダ役を与えられる元体操選手で振付け師の女優名がチャリティオークションで付けられているのも、斬新な気がしました。自分の名前を作中に使ってほしい場合、そういうものに応募したらいいんだ。すごくいい役でした。

